



2009 年 (平成 21 年)
8 月号 (No. 771)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価 1 部 150 円

URL ● <http://www.jac.or.jp>

e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目次

トムラウシ山の大量遭難と	
ツアー登山を考える	1
「もしか或る日」のデュプラと詩の由来	4
公益法人の問題は、山岳会発展の好機	6
ひとりで挑んだマナスル、幸運の登頂	8
エベレストにおける	
ヒトの生理機能に関する調査報告	9
東西南北	10
今西錦司氏の地図、国土地理院へ	
学生登山者の部会報	
活動報告	12
自然保護委員会／集会委員会／	
資料映像委員会	
図書紹介	14
会務報告	16
ルーム日誌	17
会員異動	17
新入会員	17
INFORMATION	18
図書受入報告	18
山の博物館訪問	19
市立大町山岳博物館	

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
 月・火・木 …… 10～20時
 水・金 …… 13～20時
 第2、第4土曜日 …… 閉室
 第1、第3、第5土曜日 …… 10～18時

トムラウシ山の大量遭難と ツアー登山を考える

江本嘉伸

夏山シーズンが始まったばかりの7月16日、大雪山系トムラウシ山でツアー登山の大量遭難が起きた。縦走路で風雨に打たれ、体の動きを奪われた末、低体温症で死に追い込まれたと報じられている。この夏、南アを縦走したジャーナリストの江本嘉伸さんに、シニア登山者の周辺事情と問題点を指摘してもらった。

信じられない遭難が、この夏、北の山で起きた。トムラウシ山(2141^メ)と美瑛岳で、10人ものおとなが低体温症で次々に力尽きた、という。いくら北海道の山は厳しいといっても、それなりの経験者たちであつたらうに、いったい何が起きたのか。

今回の未曾有の遭難を他人事と

思えない理由の第一は、当事者たちの年齢である。私を含め日本山岳会会員の平均年齢(67歳)とほぼ同じ世代ではないか。

とんでもない、伝統ある日本山岳会の会員にツアー登山に頼る者はいないぞ、と主張する向きもおられようが、どうだろうか。ツアーと言わずとも「連れていって

らう」式の登山は、いまの日本の登山界に案外多いのではないか。

もうひとつ、今回の遭難は、68歳の自分自身、山岳仲間と長いテント縦走をやるう、と南アルプスに出かける直前の出来事だったので、ある意味切実だった。同じミスは繰り返されてはならない。トムラウシの遭難とは何か――。

そのことを考えながらの2009年夏山となった。

トムラウシで何が起きたのか

はじめにトムラウシと周辺の山で起きたことを、まとめておく。

大雪山系では、三つのパーティーの遭難が同じ7月16日に起きた。そのうち大パーティー(3人のガイドを含む18人)だったアミューズトラベル・パーティーは強風がやむ

のを待って午前5時30分、ヒサゴ沼避難小屋を出発したが、風が再び強くなり、全員横殴りに吹き付ける雨に打たれた。おまけにこの日、外気は5度C近くまで冷え込んだ。雨は性能のいい雨具でも中に沁みこんで、急激に体から熱を奪っていった。

10時30分ごろ、北沼の分岐で女性ツアー客のひとりが動けなくなり、61歳のガイドがテントを張って付き添い、16人はトムラウシの山頂を巻くルートを進んだが、じきにバラバラになってゆき、多くが動けなくなった。

その結果、女性6人(68歳、62歳、69歳、64歳、59歳、62歳)、男性1人(66歳)、それに61歳の男性ガイドが帰らぬ人となった。トムラウシでは別に64歳の単独行の男

性が死に、美瑛岳では64歳の女性が帰らなかつた。全員、低体温症が死因と伝えられる。

装備の不備、ガイドの判断ミスと不手際、いろいろ原因は言われているが、詳細な検証は、すでに警察が捜査を開始していることであり、専門家にまかせたい。死に至る低体温症についても徹底的な究明を期待する。

素朴に感じたのは、この遭難が、知らない者同士がパーティを組んだ登山で起きたこと、安全が保証されているかに思われたツアー登山でかくも簡単に人が死ぬこともある、という現実をずばりつきつけた、ということだった。



事故の翌17日午前10時15分、トムラウシ分岐から最後の遭難者がヘリで運ばれた (写真提供=荻野真博さん)

ツアー登山の常連たち

ここからは自分の今年の夏山体験の話になる。

7月27日、私は南ア縦走(北岳から光岳)のため、新宿駅「あずさ」の車中にいた。と、人を探しているふうの年配の女性登山者がいる。聞くと、ツアー登山で穂高へ行くのだが、待ち合わせの指定車両にガイドが見当たらない、という。結局この女性は号車を勘違いしていたらしく、立川あたりでまったく別の車両でそれらしき人と落ち合うことができたようだ。ツアー登山とは同行者の顔を知らないままの出発となるらしい。

一方、私の相棒は、大学山岳部の後輩。気心の知れた仲でこそそのパーティである。コースは予備日をいれて10日という長大なものとなり、荷は20キ^ロとなった。

雨なのに日本第2の高峰、北岳(3193^{メートル})までは大した賑わいだった。ツアー登山の一行が多いためである。が、間ノ岳を熊ノ平まで行くときさすがに山は静かになった。なにせ連日の雨である。翌日の塩見岳も、ガスの中で視界はゼロ。荒川岳を越えて、荒川小屋までたどり着いた午後激しい雨

に打たれた。ずぶ濡れ状態で小屋に着いて幕営届を出した。小屋の中はツアー登山の中高年登山者たちで混雑していた。

カップラーメンを頼み、しばしストーブにあたらせてもらいつつ、男女の客たちと雑談する。雨に濡れても、皆元気だ。トムラウシの大遭難の話が当然出た。

「私もトムラウシはツアーで登りましたよ。でも縦走じゃなくてピストンだった」と元気な男性。

「そう。縦走はきついわね。私もピストンでした」と、こちらは女性。双方とも60代半ばか。日本の山をかなり登っているようだ。

ツアー登山に参加する理由を「荷を背負えないから」と、説明していた。「この歳だと重い荷はムリ。それに東京駅とか新宿とか指定された場所に行けばバスで運んでくれるのが大きな魅力」

こんな悪天候でも参加するのですかと聞くと「そう。予約してしまつと、キャンセル料がバカにならないから、だいたい皆さん、来ますよ」と、笑った。参加費については「今回は東京始発で3泊4日、8万5000円ほどです」とも。トムラウシは15万2000円

だった、と聞く。

「待ち」のない登山

翌日朝は、一瞬青空がのぞいた。しかし赤石岳に登り、下り始めるころにはまたも雨が降り出し、百間洞山の家に着いた時は土砂降り状態に。雨の中テントを張り、夕食は奮発してツアー登山の一行にまじり、この小屋名物のトンカツ定食を頼む。隣席にはツアーとは別のシニアの登山カププルがいて「疲れすぎて食べられない」と貴重なトンカツをくださった。

夜半、豪雨となった。バケツをひっくり返したような雨にも耐える新品テントの強靱さに感嘆する。翌朝も雨。「停滞しよう」と話し、入山6日目にして休んだ。

当然、ツアー一行も動かないだろう、と考えたが、テント場から5分ほどの小屋を昼過ぎ訪ねて驚いた。皆、やや小止みになった雨の合い間に出発したという。

そうか。これがツアー登山なのか。この程度の天候なら行動するのが普通なのか。1日でも延期すれば山小屋の予約、山麓への迎えのバスの調整、経費の負担方法などに厄介な問題が生じるの

だろう。体調も装備もひとりひとり違うだろうに……。

思わず7月のトムラウシ山の悲惨な遭難を連想した。ましてここ南アと違い、気温が非常に低い地域である。氷のような雨に打たれ続けられたら、たまったものではない。登山で大事な要素は、「待ち」であると思う。自然の前には、待つことが唯一の対抗策であることが少なくない。予備日とはそのためのものだ。しかし、ツアー登山という「経済行為」では、効率が重視される。

日本のあちこちの山で「待ち」がないために、「もしかしたらやばくなるかもしれない状況」が頻繁に起きているのではないかと懸念する。

聖岳を越えると、居心地のいい聖平のテント場。山小屋に前々夜、トンカツをくださったカップルがいた。きのうはツアー一行が出るのを見て、雨中、歩き出したが、結局歩ききれず、途中の兎岳避難小屋でツェルトをかぶり、1日遅れでここに着いたという。この人たちは「待ち」の時間を持つ余裕があったのだ、と思った。

8月4日、9日間かかって目的

の光岳にたどり着いた。雨が多かった割りに頑張った、と自分で思う。

百名山というビジネス

トムラウシで起きたことをどうとらえるか。ずっと考えながらの南ア縦走だった。

まず、私が想像していた以上に「ツアー登山」が広まっていることを実感した。北アルプスはもちろん、南ア南部に至っても、広範囲にさまざまなレベルのツアー登山が進行している。それも初心者だけではなく、山を登りこんでいる人が多い。

幕営の届を出す際など山小屋をのぞくと設備が充実し、トイレが清潔なものになっていくのがよくわかった。おそらく山小屋の変貌には「百名山」ブームがある。そしてその少なからぬ部分は、ツアー登山によるものと見えた。

「今回の登山で99山なんです」という年配の女性とも出会った。10年かけて登り続けた結果だそうだが、かなりの山をツアーで達成した、という。アミューズトラベルには会員が百名山を一山登るごとにスタンプを押してもらい、百名山を

制覇すると記念のTシャツがもらえる仕組みがあるそうだから、なかなか商売上手だ。

私の周辺にも「ツアー登山をよく利用しますよ」という人はいる。何よりも個人装備だけ持って指定された場所へ行けばいい「簡便さ」が魅力という。ツアー登山のパンフレットには山によって難易度のカテゴリーが示され、自分の力量に合わせて選べるのもありがたい、とも。

とはいえガイドをやっている友人は「ルート知らないガイドが引率するなんて、とても信じられないことだ」と指摘する。今回の遭難の場合、3人のガイドのうち2人がトムラウシは初めてだったという。「補助ガイドなんでしょうが、要するにコストを削りたいから、彼れらを安く雇うのだと思う」なるほど、そういう現実もあるのだ。

自分の価値で登る「私の名山」を

山に登るといふ素晴らしい行為を助けて顧客に深い喜びを与える、それがツアー登山を考え出した側の思想であろう。時間とお金に余裕がある60歳以上の山好きが急激

に増えて、それが経済行為として確立されつつある。しかし、日本では「登らせる文化」の歴史が浅いこともあって、時に大きな過ちを犯すことがある。

ツアー会社の責任は、いずれ明らかになるだろうが、事は命に関わる問題だ。今回の遭難の教訓を登り手の側から考えることが今は大事だと思う。

そのひとつは、どんな形の山行であれ、山ではいつひとりになるかわからない、自分の判断を強いられる状況になるかわからない、という現実である。責任論は別にしてそれが山登りの「宿命」のよなものだと思う。

もうひとつは、百名山から離れて自分の好きな山「私の名山」を見つけていくことではないかと私は考える。他人の価値で決めた山に日本のシニア登山者たちがこまごまでこだわることはほんとうに驚きだ。登山とは、もっと自由なものである。

目標を他人の発想に依存し、「連れて行ってほしい」と願うクライアントが多数派である限り、次のトムラウシ遭難もあり得る気がする。

カルチャー

「もしか或る日」のデュプラと詩の由来

大森久雄

「もしか或る日」という詩がある。曲がついて一時はずいぶん歌われていた。最近あまり耳にしないようだが、『岳人』誌7月号掲載、

和田城志さんの「剣沢幻視行」でこの詩がとりあげられていた。久しぶりに目にしたので、周囲の人にきいてみたら、知ってはいても正確には覚えていないし、その由来も知らない人が多かった。そこでこの機会に、この詩について紹介がてら雑談を――。

この詩の作者はフランスの登山家ロジェ・デュプラ。1951年、ガルワール・ヒマラヤ、ナンダ・デヴィ（主峰7816^{メートル}、東峰7434^{メートル}）の主峰と東峰の初縦走を計画した。ヒマラヤ8000^{メートル}峰の初登頂はアンナプルナが1950年、エベレストが1953年であることを思えば、当時7000^{メートル}を超す山稜の縦走という計画がいかに斬新だったかがわかる。このことは深田久弥の『ヒマラヤ

の高峰』所収「ナンダ・デヴィ」にくわしいが、まずそこに紹介されている詩の全文を読んでいただく。訳は深田久弥。

もしか或る日おれが山で死んだら
古い山友達のお前にだ
この書置を残すのは

おふくろに会いに行ってくれ
そして言ってくれ、おれはしあわせに死んだと

おれはお母さんのそばにいたから
ちっとも苦しみはしなかったと
親父に言ってくれ、おれは男だったと
弟に言ってくれ、さあ、お前に次
を譲るぞと

女房に言ってくれ、おれがいなくても生きて行くように
お前がいなかった時もおれが生きていたようにと
息子たちへの伝言は、お前たちは
エタンソンの岩場で



デュプラが逝ったナンダ・デヴィ東峰から主峰

そいつが映せるように

そしてお前には、ここにおれの贈物がある

おれのハンマーを取ってくれ、そして花崗岩にピトンを打ちこむ音が

身震いするような喜びでおれの遺体を揺すぶるように

壁や尾根でうんと響きを立ててくれ

さあ行け、おれはお前と一緒にいるだろう

おれの爪の跡を見つけるだろうと
そしておれの友、お前にはこうだ
おれのピッケルを取りあげてくれ
そいつが恥辱で死ぬようなことを
おれは望まぬ
どこか美しいフェースへ持って行って
そしてそいつのためだけの小さな
ケルンを作って、
その上に差しこんでくれ

人の大勢通るところから離れて、
そいつを立ててくれ
氷河の上に輝く暁の光を
尾根のうしろの真赤な夕陽を

この詩が広く知られるようになったのは、井上靖の『氷壁』で取り上げられてからだろう。そこでは詩がカタカナになっている。井上靖の「深田さんのこと」（『ヒマラヤの高峰』3 1973年刊、白水社版月報）によれば、その小説のなかに山を讚える詩を使いたくて教えてもらうために深田久弥を訪ねたという。そしてデュプラの詩の一節を使うことになったのは、この深田邸訪問によって決まったのではないかと、書いている。（『氷壁』ではデュプラではなくデュブラになっていて最近の版でもそのまま。当初の誤植がそのまま

SI UN JOUR...

Poème de Roger Duplat

Si un jour, je meurs dans la montagne
C'est à toi mon vieux camarade de cordée
Que j'adresse ce testament

Va voir ma mère
Et dis-lui que je suis mort heureux
Que je n'ai pas pu souffrir puisque j'étais près d'elle
Dis à mon père que j'étais un homme
Dis à mon frère que c'est à lui que je passe maintenant le relais

Dis à ma femme que je lui souhaite de vivre sans moi
Comme j'ai vécu sans elle
A mes fils qu'ils retrouveront les traces de mes ongles
Dans le granit des Etançons
Et toi, mon compagnon:

Prends mon piolet
Je ne veux pas que lui meure de honte
Emmène-le dans quelque belle face
Et cale-le là sur un petit cairn que tu auras fait rien que pour lui

Loin du passage des foules
Dresse-le pour qu'il soit
L'aurore triomphante sur le glacier
Et le coucher sanglant derrière la crête

Et pour toi, voici mon cadeau:
Prends mon marteau et que tes coups dans la protogine
Secouent mon cadavre de frissons de volupté
Fais tant de bruit dans la paroi et sur la crête
Va car je serai avec toi...

「もしか或る日の」フランス語の原文

になっているので、ここから引用する人は当然みんな同じ間違いをすることになる)。

さてそのデュプラ。やはり深田久弥の「ナンダ・デヴィ」を引用するのがいちばんだ。

この詩を書いたデュプラは「本」にその詩の通りになった。それは一九五一年の六月の末であった。フランスのヒマラヤ遠征は、ナンダ・デヴィの主峰と東峰をつなぐ山稜を辿るといふ大胆な計画で、

デュプラはその友人と二人で主峰へ向かったまま行方を絶ったのである。この悲劇のあった翌年、この勇敢な二人の登山家への献辞のついた、『Nanda Devi』という美しい写真集が出版された。その中に二人が小さな影となって頂上へ登って行く写真が載っている。それが彼らの見納めだった。そして次のページは白い余白になっている。無量の感慨のこもった白いページである」。

本に出ているデュプラのポルト

レートを見ると、いかにもこういう詩を書きそうな温厚な顔立ちだ。和田さんは『岳人』でこの詩を「手前勝手な言葉が連なり、少し気持ちの悪いナルシズムの詩だが、素直な気持ちも感じられる。登山家には自意識過剰な人が多いようだが、山に入るとこういう感傷的な気分になるものだ」と言っている。さらに「デュプラが成功し、天寿を全うして老人介護ホームで亡くなっていたらこの詩は受けなかっただろう」という現代的解釈を披露している。たしかに、少々気恥ずかしいところのある詩ではある。ヒマラヤ初登頂時代が持っていた一種のロマンティズムが背景にあるとは言えないだろうか。そういう雰囲気が消えた現代では生まれようがない詩だが、ドライな登攀報告よりも、山登りの本質の一面を表わしているとは言える。

詩の原文は、フランス語という少数言語(?)のためか、まったくといってよほどに日本では知られていないから、この機会に全文をご紹介する。

この詩は同行のカメラマン、ジャン・ジャック・ラングバン Jean

Jacques Languelin の『Himalaya Passion Cruelle』より、『Nanda Devi』とともに現在は国会図書館の深田久弥旧蔵図書で閲覧できる。前者は『もしかある日』北沢章平訳・二玄社刊、1963年がある。詩に出てくるエタンソンに興味のある方は、山と溪谷社刊の拙著『本のある山旅』所収「エタンソンの谷」を参照いただきたい。なお、ナンダ・デヴィの初縦走(東峰主峰)は、1976年、日本山岳会隊(隊長・鹿野勝彦)によって達成されている。

オピニオン

公益法人の問題は、山岳会発展の好機

大森弘一郎

今、公益法人の問題を契機として、日本山岳会のあり方を多くの人々が考え、貴重な意見を述べておられる。私はこの問題の発生を、会の発展の好機だと感じるので、そのことについて述べてみたい。

エベレストが未踏峰でなくなっ
てから、そして地球上の未踏峰が
減るにしたがい、パイオニア精神
をぶつける挑戦の対象がなくなり、
希望がなくなり、だから会のパイ
オニア精神も薄れた、という見方
もあるが、それは贅沢な言い訳の
ように思う。

山という、人間にとって巨大な
自然（地球から見れば小さな皺）
のなかの、ほんの一部に、ほんの
一時、人は割り込ませてもらって
いるだけなのだから、山を全体で
広く見れば、対象はいくらでもあ
るのであって、われわれのパイオ
ニア精神が貧弱なだけに過ぎない
のだと思うのだが、いかがである
うか。

山と接する内容を広くすれば、
つまり頂上に、ある短時間立つ（い
る）ことだけを登山だと考えるの
をやめて、裾野を広げて山の周辺
にある未知のテーマへの挑戦を考
えることにすれば、対象はほぼ無
尽蔵だと言えるはずである。

われわれが持つ素晴らしい定款
を読み直してみるとすごい。第2
章・目的および事業の第3条の目
的には、山岳に関する研究、知識
の普及、健全な登山指導・奨励、
「会員相互の連絡懇親」、登山を通
して体育・文化・自然愛護の精神
の高揚をはかる、とある。これの
「」の部分を除けば、これはどう
見てもまったくの公益法人である。
そして会員は本会の目的、つま
り右記のことに賛同して入ること
になっているが、賛同してそれを
やる人とは書いていない。そこで
現実には目的に賛同して自分がやら
ねばならないとは考えず、会がや
るのに賛同して「会員相互の連絡
懇親」の場だと思っている人が多

くなる。実は私自身、今回、定款
を読み直してみても、今まで山岳会
のなかで遊んでいたけれど、「なん
だ、われわれは公益を目的として
いたんだ」と思った次第である。

もともと登山は私益の固まりみ
たいなものだ。いくら立派な登山
をやっても、最近の社会では公益
にはなりにくい。その私益を他に
分かつ時に公益は発生する。昔は
これが意識しなくてもできる環境
だったが、今は積極的に働かねば
ならなくなっている。自分の楽し
いことに、他を呼びかけて同道す
る。それを通して山から挑戦の心
を学ぶことを伝えるとき、その行
動は公益になるのではないか。

定款の「山岳に関する」をより
広げて「山岳から得られる」とし、
日本山岳会の「山」を「未踏へ挑
戦するもの」のように捉えること
ができれば、パイオニア精神をぶ
つける道場として、これは無尽蔵
の鉱脈であると言える（そもそも、
公益法人化という目標もパイオニ
ア精神発露のひとつだ）。

アルバータの時代、マナスルの
時代には、登ることがパイオニア
ワークとしてあった。いつの時代
にもその時代のパイオニアワーク

があり、今日の対象は昔よりもつ
と広い分野の中にある。まずその
ように考えよう。われわれの対象
は無限に残っている。次は取
り組みの姿勢だけである。われわ
れには、山から始まったパイオニ
ア精神を広める役割があると。

世の中の会には、同好者が集ま
り、お互いに温め合いながらその
暖に人々が集まってくる会がある。
一方、活動を目的として、その活
動に参加して人が集まる会もある。
その会の掲げる活動目標が魅力的
ならば人は集まるのであり、これ
は「同好者」の集まりというより
「同志」の集まりとなる。われわ
れの場合はその中間にいて、どち
らに軸足を置くか迷っている。

そこでやる具体的な活動が多岐
にわたっていたとしても、例えば
「高きに登るパイオニア精神をひ
ろめて、その精神を持つ活動を助
ける」という姿勢を一貫したテー
マにするなら、その活動がどのよ
うであろうとも、高きを目指すも
の——「人にとっての山」——と
つながるものであるなら、よいと
するのである。
そのように大袈裟に考えなくて

も、自分の好きなことを他に分かつことを常に願ひ、またそれを目標にするなら、その「山」を目指すことは、そのまま公益活動になる。自分のために登っている山を公益というには無理があるが、それを他にも役立てることを考えれば公益となるので、それを不純だと思わないで意味があると思うことではないか。

自分の登りたい「山」(やりたいこと)に集まってい(やる)のは私益で、登山教室や植林や自然保護活動は公益であると考えられるのではなく、バイオニア精神としての「山」を広めることを使命と考えよう。

そして行動としては、自分の楽しみを享受する活動をするだけではなく、自分が楽しいと思うことを他に与える機会を作り、常に呼びかけ、心の門を開いていることで、行動は公益となるのではないか。そして来た人を温かく遇することではないか。簡単に言うなら、会の行事(登山など)をするとき、一般にも参加を呼びかけるということだ。ホームページその他の持てる広報手段で、その活動への参加を呼びかけるなら、その結果と

して一般参加がかりに少なからうとも、その活動の半分は公益活動であることになる。その気持ちを保持して示せば、目的も半分は公益目的である。

つまり会員の心が、自己利益、仲間中心であることを止め、一般の人(会員外)に利益を与えることを求める気持ちになり、それを喜びとして行動するなら、会は社会の利益のためにあることになる。これはおそらく典型的な公益法人であると思う。支部も委員会も同好会も、例えば企画する登山活動を一般にも開放し(目的に合う人かどうかの人選はあって当然)、それを喜びとする。会員がそのような姿勢になれるなら、会の資金のほとんどは公益のために使われていることになり、その行動が進めば、結果として自然に会は会員増となると思うのだ。

私は会の公益性は、会員の活動姿勢の中にあり、その公益人の集まりの活動の結果が、会を公益法人に相応しくする、と思っっている。会がその将来の姿として公益法人になりたいかどうかではなく、会員が利他の行動を喜ぶ公益的姿勢

を持ちたいかどうかである。もし会員がそうなら、会はどんな困難を乗り越えても公益法人になるべきだ。もし、それが無いのに、会が公益を目標にして公益法人になれたとしても、あまり意味のないことになる。そして会員の姿勢を背景にして公益法人になれた時には、結果として、会は素晴らしく発展するだろうと思う。

公益性を客観的に示すことは簡単だ。すべての(ほとんどの)活動には支出と収入がある。普通はそれを内部で処理して、差額だけを表に出すが、公益だと思っ活動の場合はその収支を、面倒くささらずに帳簿にのせて、通帳の残高と金額を合わせて、それを本部の会計に渡して集計してもらえばよい。本部の委員会も、同好会も支部も、とりあえず「日本山岳会○○」の公益活動通帳を残高0円で新しく作り、これでスタートして、それを期末に全部本部の会計に渡して、これが会の総収支に入るようにする。ほとんどの、と書いてあることに注意していただきたい。活動には当然数字に見えないものもあるので、それは帳簿に出なくても仕方がないし、過去の

中身にはこだわらないとするのがよいと思う。

公益法人の問題は、会費の半分以上を公益活動に使うとか、会の運営上どちらがよいかとかいう視点ではなく、それぞれの会員が、会の名でやる各種の活動において「一般の方もご参加ください」という一言を入れることを「嬉しい」と思うかどうかにかかっているように思う。私は私益の活動に公益性を持たすこと、公益性が高いと思われる活動を喜ぶようになりたと思うのだが、皆さまはどうお考えだろうか。

クロニクル

ひとりりで挑んだマナスル、幸運の登頂

細川光一

今回のマナスル登山は、予定していたチヨ・オユー公募登山が、中国への入国ができず中止となったことに端を発している。トレーニングを含め装備、食料など準備完了してからキャンセルは失念したような心境で、66歳という年齢から体力的にも最後のチャンスと思い、あせりを感じていた。「どこか、これからでも登れそうな山はありますか」と、以前、アイルランドピークを1人でも引き受けてくれたカトマンズのエージェントにメールをすると、マナスルではどうかという返信があった。私が予想した以上の高いレベルの山なので1度は断わるが、熱心な勧めを受け、目標を7000^{メートル}に定め、4月10日、ひとりりでカトマンズに向け出発した。

4月14日、アルグハットを約20名のポーター、シェルパ、コック、キッチンボーイ、リエゾンオフィサーと出発、BC山麓の村サマに向かった。

4月19日、キャラバン6日目、待望のマナスルの峰が顔を出す。うれしさがこみあげてくる。やがて今回のキャラバンでもっとも広々とした谷、ロバ、ヤクを放牧する草原を越えるとサマに到着した。

4月26日、晴れ後雪、C1からC2へ。クレバス帯のなか、安全と思われる狭い場所で小休止、野口健隊も追いつき休憩。「ひとりで退屈しませんか」と声をかけてもらう。BCでは私と野口氏のテントは20^{メートル}の距離で、顔を合わせるたびに話しかけてもらっていた。そのことが空虚な気持ちの隙間を埋めていたように思う。

5月15日、今までC3で3度待機していたが、今回は最後のチャンスと望みをかけBCを出発する。

5月18日、晴れ、C3からアタクキャンプであるC4へ。

5月19日、晴れ、いよいよアタクの日だ。1時過ぎ、早めだが起きだす。外は、満天の星で、風

5月19日、憧れの8000^{メートル}峰に登頂した

もない。酸素ボンベを装着し、2時に出発しようとする、スペイン隊の女性が蒼氷帯が怖くて登れないと下山してきた。

ヘッドランプの光と月光の反射で思ったより明るい。酸素の威力は素晴らしく、5000^{メートル}地点は無酸素で登ったときと同じような感覚だ。

9時、今まで見上げ続けたピナクルもほぼ水平になり、そこを過ぎると傾斜も増しジグザグ登高となる。間もなく1本目のボンベが空となった。急斜面直下の窪みで交換し、シェルパが先に行けというので登りきると、先行のパーティに追いついた。そのシェルパが頂上と指差したのは、50^{メートル}くらい

先のピークだ。

11時ちょうど、一瞬の戸惑いとうまく登頂した安堵感とともに頂上に立った。山頂からアンナプルナ山群が足元に見え、ようやく喜びがこみ上げてきた。

周囲の人の協力と時間的余裕、そして好天の持続があつて、夢だった8000^{メートル}峰の頂に立たせてもらえたように思う。

ひとりりで出かけ、天候不順での停滞やひとりの食事、食後から翌朝まで孤独感で、正直登頂を諦め下山したい気持ちになったこともあった。また、1カ月を超える高所での登山は思った以上に心身ともに疲労し、わずかな事で感情的になることもあり、シェルパとの軋轢も生じたことがあった。それが登頂の喜びを半減させ、登山より人間性をもっとトレイニングすべきだと反省もさせられた。

退職後、登山を再開し、山岳会に所属しなかったために仲間と海外登山のチャンスが少なかったが、仲間とこの喜びを共有できたら、もっと素晴らしかったと思う。

現在、支部や本部の人達、古い山仲間にも祝ってもらい、改めて登頂の喜びをかみしめている。

メデイカル

エベレストにおける ヒトの生理機能に関する調査報告

小清水敏昌

エベレストはわれわれ岳人にとって憧れの強い山のひとつである。昨年5月26日に75歳の三浦雄一郎氏が最高齢者としてピークに立ったのは記憶に新しい。すでに世界で3844人が山頂に到達しているが、このうち日本人は延べ165人(平成21年5月23日現在)という。

一般的にヒトの体力の限界について研究することは難しく、医学的な検討が必要とされるからである。最近、海外の医学雑誌にエベレストにおけるヒトの生理機能の限界を調べた論文が発表されたので紹介したい。これは、医学においては世界的に著名な『New England Journal of Medicine』誌という臨床医学雑誌に掲載されたものである。この雑誌は投稿しても査読が厳しく、6割程度しか採択されないと言われている。

その雑誌の本年1月8日号に掲載されたのがGrocottらの報告で、

ロンドン大学を中心としたXtreme Everest Research Groupが英国麻酔学会、英国集中治療財団などの支援を得て、南東稜から2007年5月23日早朝に8848mの山頂に到達し、種々な医学的試験を行なった報告である。当初の計画では、山頂で登山者から採血する予定であったが、悪天候のためバルコニーと称される8400mの地点で小さなシェルターを組み立て、その中で4人の登山者の右大腿動脈から採血することに成功した。その場所では彼らは酸素マスクをはずして約20分間外気を吸っていた。バルコニーでの採血後、直ちにこの血液を測定機器のある6400mの地点まで運び、種々の分析を行なった。このときの血液を2時間以内で運んだシェルパの名を論文の最後にあげ感謝している。

今回の登山では、全員が第3キャンプ(7100m)から上で酸

素補給を受けていた。研究目的の動脈血採取はロンドンを出発した際に10人のボランティアの登山者(女性1人、男性9人、年齢22〜48歳)から、その後は5300mのBC及び6400mのC2では9人から、7100mのC3では6人から、外気を少なくとも4時間以上吸った後に行なわれ、それぞれを比較検討している。高地で採取した血液中の酸素、炭酸ガスなどを実測した予測値の計算をして肺の機能などを医学的に調べたが、低い気圧で低酸素状態のような生理的な限界であっても人は順応することができるとはならないかと結論づけている。

この報告が雑誌に掲載されて、約3カ月後の同誌4月30日号に、この論文内容に対するいろいろな意見と著者らの回答とが掲載された。Grocottらはそれらの医学上の専門的な意見に対して回答している。細かい部分は省略するが、このうち特にわれわれ会員にとって興味があると思われるのは、高地ゆえアセタゾラミド(ダイアモックス錠)を使ったかどうかについては、飲まずに終始わずかな鎮痛剤のみであったと回答している。

一方で、これまた世界的に著名な臨床医学雑誌『Lancet』誌の5月9日号に、このGrocottらの報告について論評しており、8400mで動脈血を採取し科学的に解明しようとしたことは大きな成果である、と賞賛している。

このようにエベレストでの医学的研究結果について、世界的に著名な臨床医学雑誌に採りあげられたいことは、医学と登山の面からわれわれ医療関係者にとっても大いに興味をそそられる内容である。

N

東 西 北

東 西 北

S

 会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

今西錦司氏の地図、国土地理院へ

四手井靖彦

第十二代会長今西錦司氏が残した地図1281枚がこのほど、長男・武奈太郎氏から国土地理院に寄贈された。大正時代に今西氏が登山を始めたときから使用した5万分の1と20万分の1地形図で、1500山と言われる今西氏の登頂ルートが自身の手で赤線で記入されている。

国土地理院は今後、内容の詳細を確認した上で目録を作成し、情報サービス館において保管するとともに、閲覧、謄抄本交付業務、「地図と測量の科学館」での企画展示等に利用する予定だという。

今西氏は1902年、京都に生まれ、幼少のころから趣味の昆虫採集で自然に親しんだ。京都第一

中学校に入学してから本格的登山に出合い、教師の引率で富士山や御岳、日本アルプスの槍ヶ岳などに登った。やがて、仲間と登山グループを結成して北山を跋涉する。

第三高等学校から京都大学時代は日本の近代アルピニズムの黎明期であり、スキーや氷雪技術を身につけ、先鋭的登山に熱中した。慶應や明治といった先進的山岳部と肩を並べて剣岳源次郎尾根や三ノ窓チンネなどの初登攀記録を残している。

初登山主義を掲げる今西氏は、1931年にAACK(京都学士山岳会)を結成してヒマラヤ遠征を目指したが、戦争のため実現しなかった。このころから登山より探検的志向が強まり、蒙古(モンゴル)草原や北部大興安嶺に足跡を残す。

戦後、登山界が復興するとマナスル登山を提唱し、自ら踏査隊長

を務めて日本隊の初の8000m峰登頂の基礎を拓いた。1955年には京大のカラコラム・ヒンズークシ学術探検隊カラコラム支隊長を務め、憧れのバルトロ氷河も踏んだ。

京大を定年退官後、岐阜大学学長を務めたが、このころから国内の山への回帰が始まった。揖斐、長良川の上流、いわゆる「美濃・飛騨」地域に魅力的な山が多かったからかもしれない。「山があるから学長を引き受けた」と聞いたことがある。岐阜支部の創設を促し、率先して「地元」の山に登った。日本山岳会の会長に就任してからはさらに山のネットワークが広がり、京都や岐阜の山仲間と全国の未踏の山へ足を延ばした。支部間の交流にも貢献した。

今西氏が日本国内の山に回帰したころ、京大退官前年の1964年、63歳時の登頂数は400山である。3年後には500山、さらに3年後には600山と急ピッチで増えていく。1978年8月、76歳で登った奈良県の釈迦ヶ岳が1000山目となり、1985年11月にやはり奈良県の白鬚岳で1500山を達成した。83歳であった。

今西氏は4年4カ月の闘病のち1992年に90歳で没した。登山は1987年12月に神戸の高丸山に登ったのが最後で、生涯登山数は1552山であった。

書齋でくつろぐとき、今西氏はよく地図を眺めていた。次なる登山の計画を巡らせ、踏破したルートに赤線を入れるのであった。山の選び方は人によってそれぞれだが、今西氏の場合、単に高きをもつて尊しとはせず、未知なる地域の新しい山を求めた。即ち、今西氏の内なる初登山主義であり、地

図上の赤線の「美学」であった。ちなみに、今西氏作成の「千五百山のしおり」による地域別登頂数は北海道70、東北86、越後会津51、関東周辺138、東海76、中部山岳166、美濃北陸123、京都周辺294、紀伊半島140、中国地方149、四国90、九州126であった。

学生登山者の部会報

鈴木正規

戦前戦後の学生登山者の部会報の内容を説明するには、わが国に近代登山の風潮が興った明治中期以降にさかのぼる。日本山岳会が誕生したのが明治の末から大正の初期の頃、登山史からいえばいわゆる探検登山の時代である。それは主として夏季におけるピークハントイングの時代、その舞台は飛騨の山や木曾の山々であり、夏季における主な峰々はほとんどこの時代に登山者の足跡が印されたのである。

その探検登山が一段落してから岩登りといった新しい形式のスポーツ登山になり、その中心となっ

て登山界に深い影響をおよぼしたのが、慶應、学習院、早稲田などの学生登山者であった。

そのなかで慶應の部報『登高行』と早稲田の『リュックサック』などが部報ではもともと初期のものだった。大正時代の終わりから昭和のはじめにかけて明治『炉辺』、法政『山想』、立教『部報』、東京商大『針葉樹』、北大『部報』、松本商高『わらじ』、四高『ベルグハイル』と甲南や三高の『部報』などが次々と発行された。このほかに昭和の初期に東西応呼して結成した『関東学生山岳連盟報』と『関西学生山岳連盟報』なども見落とすことはできない。

大正4年に横有恒を中心として設立した慶應山岳部の『登高行』が第1号として発刊されたのが大正8年のことである。

特に大正12年発行の第4号は、わが国のスポーツ登山としてアイガー東山稜の初登攀を成し遂げ、ヨーロッパ登山界にその名をとどろかせた記録がある。また積雪期の北アルプスに進出し、槍ヶ岳、立山、剣岳に見事な記録をうちたてた報告もズラリと並んでいる。第5号は春の穂高連峰のスキー

登山、夏季の前穂高北尾根、屏風岩、小槍などの記録。

第6号には大島亮吉の「荒船山と神津牧場付近」とマウント・アルバータの印象が横氏によって記されている。

7号は大島亮吉の遺稿「遊技的登山派の斗将マンメリー」を巻頭に、厳冬の立山、剣岳の初登攀の報告がある。

また慶應に対比して早稲田の『リュックサック』であるが、内容はとても『登高行』に比肩するという訳にはいかない。早大は大正9年に発足したが、創刊号は大

短歌

五月の鏡平



双岳を
下りてゆけば
眼の明に
槍ヶ岳登りや
鎌尾根の上に

正11年に菊版で発行し、昭和9年の第7号で部報は終わっている。戦前版は昭和17年の第10号が最後となり、その後昭和34年に復刊して現号まで続けられている。そのほかに昭和の初期に剣岳や鹿島槍に集中的初登攀を残してきた立教の『部報』がある。この全9冊には、現在の登山にも立派に参考になる記録がいっぱい掲載されていることを触れておかねばならない。

宇都木慎一



雪原に雷鳥のつがひ
たはまれ。まだこの姿
は山肌に似て
這松に餌をつばむ
雷鳥は冬の高嶺に
いかに耐へしか

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

自然保護委員会

全国集会、秋田で開催

09年の全国集会は、秋田支部設立50周年記念事業の一環として秋田支部との共催で、6月20～21日、秋田市で開催された。

参加者は、23支部および首都圏の会員102名、招待者4名、会員外一般参加者41名、報道関係1名の計148名となり、盛況であった。

20日の午前は、秋田支部長・佐々木民秀氏と恩田小夜子実行委員長の開会の挨拶にはじまり、6支部より次の報告があった。東九州支部（九重の自然を守る―野焼きと清掃登山・登山道の整備）、福井支部（里山の森づくり活動）、東海支部（生物多様性条約第10回締約国会議パートナーシップ事業について）、宮崎支部（支部の活動報告）、北海道支部（北海道における

高山植物盗掘防止パトロール）、福岡支部（屋久島世界自然遺産登録と現状）。続いて本部の山川陽一理事から「最近の自然保護委員会の活動について」と「野生鳥獣目撃レポートについて」、岐阜支部の西条好迪会員から「シカの採餌行動について」の報告があった。

午後の全体集会は、バスハイク組や一般参加者も加わって会場は満員の盛況となった。神崎忠男副会長は挨拶のなかで、JAC当面の課題として、公益法人法への対応、森づくりのルール化、「山の日」制定への行動、首都圏の支部化、高齢化と登山の5項目をあげて話をされた。続いて、秋田県生活環境部自然保護課課長、金澤千昭氏による来賓挨拶と、他の来賓2名の紹介があった。続いて、森吉山で天然記念物である「クマガエラ」を最初に確認した秋田支部の会員・泉祐一氏から「ブナは残った



秋田市で盛況のうちに開催された自然保護委員会の全国集会

のか」の演題で基調講演があった。その後、パネル・ディスカッションが開始された。このパネル・ディスカッションは、「山の日を考える―東北山地が語る日本の山岳環」と題して、村田孝嗣（青森支部）、小野寺正英（岩手支部）、佐藤淳志（山形支部）、柴崎徹（宮城支部）、高田雅雄（福島支部）の5氏に、基調講演者の泉氏も加わり、問題点の提起や報告があった。また、「山の日」制定に関しては、山の恵みや自然に感謝し、山との付き合い方を学ぶ日として考えたい、山岳文化や自然環境を考えると、いう視点を充分におりこんだ「山の日」としたい、特に、子供達を巻き込んでいくことが重要との意見

が出された。

21日は、太平山登山と太平山麓散策に別れてのフィールドスタディである。早朝、本格的な雨であったため、太平山登山のうち健脚コースの宝蔵岳経由は中止を決定、一般コースに合流することとなった。一般コースの実施も懸念されたが、出発時には雨は止み、時間の経過とともに天気はよくなり、秋田杉とブナ林の秋田の大自然を満喫した。

本集会開催にあたり、支部を挙げてご協力いただきました秋田支部の皆様に対して厚くお礼申し上げます。
(富澤克禮)

集会委員会

熊野古道のハイライト、奥駈道の走破

神・仏の道は一本道とばかり、新緑まぶしい熊野古道・奥駈道の北半分（吉野～前鬼）を、6月10日～14日の4泊5日で走破した。北海道支部から参加した3名を含む最高齢75歳を筆頭に総勢21名（うち女性5名、委員会幹事4名）が、集会委員会の企画に応じた。6月10日夕、吉野上千本の宿坊、



「女人結界門」の前で記念撮影

桜本坊に集合。2日目は雨混じりの強風のなか、吉野金峯神社から歩き出し大天井ヶ岳を目指す。在来道の巻道もあるが、われわれは直登して頂上を踏んだ後、「女人結界門」のある五番関の鞍部へ下った。ここから先は、宗教上の理由で女人禁制となっているため、女性陣と付き添い2名が洞川温泉に下った。残りの男性陣は木製の階段道の多い山上ヶ岳へ向かう。午後5時すぎ、宿坊の桜本坊に到着した。

宿坊管理の佐藤氏の案内で、大峯山寺を参拝、戸開けと戸閉めの年2回しか開帳されないという役行者の秘仏を、特別の計らいで拝見させてもらった。佐藤氏は東九州支部の西孝子氏の友人とか、J

ACの活動をよく理解されていた。3日目も3時半起床、5時出発。好天のなか、約3時間で大普賢岳、ここも巻道をとらずに頂上へ。シヤクナゲの群落が見られ、所どころ鎖場のあるアップダウンを繰り返して、行者還岳を過ぎた所で洞川温泉から登ってきた女性陣と合流、「柿の葉ずし」の差し入れに歓声を上げた。女性陣の昨夜の食事は定かではないが、鴨鍋であったとか……。

行者還岳から先もアップダウンの激しい岩場混じりの尾根が続く、5時すぎに弥山小屋に到着。到着が遅いこともあって、夕食後早々に就寝した。

4日目、今日も好天。朝食前に弥山頂上を踏み、6時出発。吉野杉の美林を眼下にした紀伊半島中央部の山と谷の深さに驚きながら、近畿の最高峰、八教ヶ岳(1915m)を順調に登り、所どころ宿坊跡が残る尾根筋を明星ヶ岳、仏生ヶ岳へと進み、今回の山行最後の釈迦ヶ岳に直登、頂上には大正13年建立の釈迦像が天高く鎮座していた。釈迦ヶ岳から太古ノ辻に下り、最後の前鬼・小仲坊へ。急な悪路を汗びっしょりで下り、小

仲坊・五鬼助氏の歓待を受けた。夕食時、好天に恵まれた全員無事の走破を喜び合った。

5日目の最終日、不動七重滝を横目で見ながらゆるやかに下る舗装道路を約2時間半。前鬼口からバスで近鉄・大和上市駅に戻った。

私は、集会委員会の山行に参加したのは初めてであった。宿坊の手配、参加者の体調観察など、幹事の方々の尽力に感謝したい。この企画がなければ、大峯山脈に足を踏み入れる機会はなかったかもしれない。また山行を共にした20人の会員と親しくなることもなかったかもしれない。今後とも会員サービスの一環としての山行の企画を続けてもらいたいと思う。熊野本宮大社に至る奥駆道南半部は来年初に計画しているとのこと、ぜひ参加したいと思っている。

(吉永英明)

資料映像委員会

資料管理データベースの整備

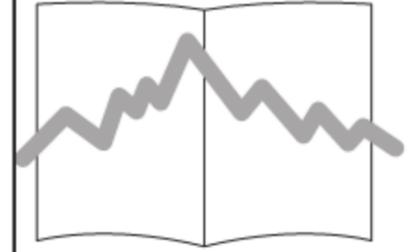
資料映像委員会は、日本山岳会所蔵の貴重な資料と映像を管理運営しています。事業活動として、資料管理業務はもとより、全国に

ある山岳博物館等の学芸員との会議(全国山岳博物館等連絡会議)、先人達の講演会開催、資料・写真展示等があります。

今回は、資料の管理業務に新しいシステムを導入すべく検討してきた経緯と現状について報告します。映像や資料は、山岳会会員はもとより、会員外の方々からも寄贈を受けてきました。これまで資料の管理は台帳を作成して行なっていました。作者、使用者、寄託者、いわれなどの情報に、写真も加えた新しい台帳の検討をしていました。

そこで、昨年の5月に財産管理に実績のある、(株)エイジスへデータベースの整備(ハード、ソフト、データ移行作業など)を一括発注して、整備を進めてきました。現時点では、データベース機能はほぼ完成し、最終段階に入り、システムの不備等がないかのチェック作業に入っています。データに関しては、資料情報の追加、資料の撮影等の作業がまだ残っています。早期に立ち上げを目指して作業を進めているところです。完成した時点で、会報『山』で報告をする予定です。

(鈴木敬吾)



図書紹介



山岳写真同人四季・著

『墨色日本の山』



2009年3月
東京新聞出版局刊
25×26センチ 96ページ
定価 2600円

デジタル全盛の時代に、なぜモノクロ・フィルムによる手焼き写真なのか。その答えは本書をめくと自ずと見えてくる。

山岳写真は、撮影自体に多大な労力がかかる。巻末の作品解説を読むと、中判や大判のカメラを背負って雪山に登り、テントのなかで吹雪の夜を過ごしたのちに撮られた1枚が多いことがわかる。カラーポジやデジタルならばここで苦労の大半が終わるが、モノクローム写真にはまだ先がある。「帰心

矢の如し」と自宅に帰って、暗室にこもりフィルムを現像して、試

行錯誤を重ねながらフィルムを印画紙に焼きつける。1枚の写真に費やされる労力は、カラーポジやデジタルの比ではなく、それだけ撮影者が込める思いも大きい。それこそがモノクローム写真の特徴であり、長所だと本書は語る。何十人もの会員によって撮影された四季折々の作品1点1点から、その時間と意思を読みとれたら、本書の味わいは何倍にもなるだろう。そのほかにもモノクロームを選ぶ理由として、「色彩を山岳風景から消しさる」と「山の厳しさ、雄々しさ」が浮かび上がることと、「色のないグラデーションで表す」ことにより「アートとしての写真表現」が可能になることが挙げられている。

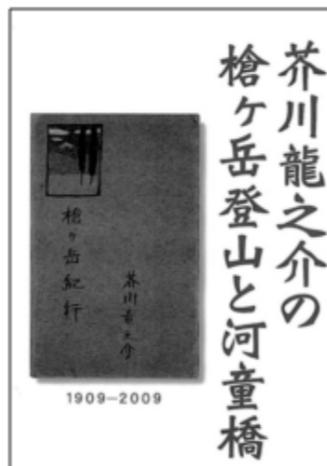
最後に、印象に残った写真を3枚あげたい。1枚目は「秋雲流れ

る／上高地」。赤外フィルムを使い、空と雲のコントラストを強調した気持ちのいい作品だ。2枚目は「烈風の東壁／北アルプス・赤岩尾根」。連なるひだのような雪稜に、べつとりとつく雪がなまめかしい。3枚目は「風の刻印／室堂平」。吹雪後の雪面の紋様を陰影だけで見せる芸術的な1枚。

壮麗な風景を前にしたとき、そこから色彩を消しさるには勇気がいる。いつか私も、ライフワークの山でモノクローム写真に挑みたいと思う。
(小林尚礼)

上高地登山案内人組合・監修

『芥川龍之介の槍ヶ岳登山と河童橋』



2008年11月
上高地登山案内人組合監修
A5判 210ページ

1909年8月12日、芥川龍之介は槍ヶ岳に登頂した。今年が百年にあたり、本書は、その記念事業の一環として、2008年11月に刊行された記念誌で、「本編」と「資料編」の2部からなる。「本編」には、伊藤一郎、布川欣一、

牛丸工の三氏による論考およびフイクション『槍ヶ岳紀行 続編』が含まれ、「資料編」には、芥川が書いた3つの槍ヶ岳に関する文章（「槍ヶ岳紀行」「槍ヶ岳に登った記」「槍ヶ岳嶽紀行」）の他、山や河童関連の文章と詩文が集められている。

芥川の槍ヶ岳登山については、紀行文が残されていたものの、頂上登頂の記述を欠いていることもあって、その実態は不明な部分が多かった。百周年を機に、執筆者たちが資料の再検討や発掘を行い、その結果明らかになった事実や資料を踏まえて、芥川の3つの文章を比較しながら、登山の次第をより具体的にたどろうとしている。芥川の記事自体はどれも短いもので、それぞれの執筆意図を明確化することは容易ではないが、そこには、それぞれに異同が見られ、単純ではない関係がありそう

だ。登山の時、芥川は府立第三中学の五年生、17歳だった。中学時代の芥川は、いわゆる文武両道の活発な少年で、槍ヶ岳行きも彼の発案だったという。学校自体が自由主義的な教育方針をもち、遠足な

どのよる身体の鍛錬には熱心だったといわれるが、そうした雰囲気の中で、小島烏水の『山岳無尽蔵』を読んだことが、直接のきっかけだったらしい。それにしても、烏水自身の槍ヶ岳日本人初登頂が1902年、烏水の本が出たのが1906年、それで自分も登ってみようというのは、中学生の企てにしては実に大胆だ。こうした姿は、腺病質の悩める作家として定着した後のイメージとはかなり異なるもので、はたして彼はこの登山で何を体験し、何を持ち帰ったのか。そのあたりは、この作家の研究にとっても充分興味深いテーマにちがいない。

槍ヶ岳の絶巔を眺めながら「山は自然の風景の始にして終なり」というラスキンの言葉を心に記した若き日の芥川には、雄大な山と接した時、そこに崇高さと清らかな世界への憧れを求め、心情が働いていたと思われる。その想いが、後の作品『河童』のモチーフに反映しているとの見方が本書では提示され、その主人公を死に至らしめたのも、いわゆる「憂鬱」ではなく、「娑婆界と無縁の世界に對する、諦めることをしらないあ

まりに激しい憧れ」であったと理解することで、作者自身の自殺の意味をも探ろうとしている点は興味深い。
(飯田年穂)

京都大学探検部・発行

『探検 第一四号』



京都大学探検部の機関誌『探検』

は、1956年に創刊号である第0号が発行された。しかし1990年に第一三号が出版されて以来長らくその発行がとぎれていた。今回じつに18年ぶりに第一四号が発行されたのである。わが国では探検に関する出版物が限られているので、ここに紹介したい。

『探検』は探検部の活動を記録し報告するのみならず、探検活動にともなう意見・希望などのさまざまな事象を広く伝えてきた。しかし、創部以来50年を超える歴史のなかで社会情勢も変化しており、探検部の活動内容も大きく変遷している。

本書の内容は、現役部員あるい

は若い卒業生による座談会と自由なテーマの文章からなり、入部の由来、現在の探検部としての活動内容、個人単位の探検的活動、そしてなによりも探検への思いが多くの箇所ですべて述べられている。

座談会「探検とは何か」は、探検というテーマに正面から取り組んでおり、探検部や探検について部員達による多様な議論である。現代における探検の意味を問い、探検を志す若者たちの心に抱く探検像が見えてくる。

現今では地理的に未知な場所などほとんどなく、古典的な探検のイメージを満足させてくれる対象は少ない。探検とは何か、と追求するのは、そのような境遇が部員達を一番悩ませているからだ。探検という言葉はあるが、現代のそれは何か具体的な活動を示しているのではなく、その活動はどうしても主観的になる。それが部員達を駆り立てるが、同時に苦しめている。探検部という特異なクラブの事情が、本書の各所に現われている。

それでも若い探検者たちは、個人ベースで積極的に活動しているようだ。その様子が、いくつかの

文章に述べられている。その活動範囲は先輩たちの範囲を凌駕しているくらいだ。極北の地シベリアに、アフリカに、あるいは南米の奥地に、若い探検者達は活動している。部活動としてはアウトドアにおける登山・カヌーなど、フィールドワークが中心らしいが、それは探検活動にとっては非常に重要なことである。探検とはフィールドワークを通してのパイオニアワークなのだから。

これが新しい時代の探検なのだろう。古典的な探検は大キャラバンを引き連れ、何カ月もの行動を必要とした。しかし今は、チョモランマの頂上からお茶の間と通話できる時代、探検も当然コンパクトなものとなるであろう。京大探検部が創立できたのは、学生によるライトエクスペディションを期待した先輩達のおよび支援があったからだ。先輩達は、準備に費やされる膨大なエネルギーを惜しみ、若い学生が手軽に実行できる探検を夢見ていたのである。探検の時代が逼塞しているのではなく、探検も変貌しコンパクト化したことを、本書は物語っている。

(沖津文雄)



平成21年度第4回(7月度)理事会

日時 平成21年7月8日 18時30分～20時30分

場所 日本山岳会会議室

【出席者】尾上会長、神崎・宮崎・藤本各副会長、成川・岡部各

常務理事、太田・堀井・相馬・山川・野沢・中山・永田・萩

原各理事、深川・平井各監事、

酒井・近藤・森各常任評議員

【委任】谷川理事

【審議事項】

1・学生部パンポチェ登山隊派遣について(相馬)

パンポチェ(6620^{メートル}未踏峰)

を目指し、学生部学生隊員6名(隊長・蔵本悠介)を派遣したい。8

月19日に出国、10月中旬帰国予定。総予算700万円。(承認)

2・三国学生友好登山隊派遣について(相馬)

第3回日中韓学生友好登山は、中国青海省の玉珠峰で開催(8月

報告

18日～27日)される。隊長・吉永英明、医師・野口いづみ、学生9名、会代表・宮崎副会長、計12名参加。(承認)

3・新プロジェクトチーム委員長・担当理事について(宮崎)

緊急の課題に対応すべく次の3プロジェクトチームを立ち上げ、その責任者を決定した。今後各プロジェクトのメンバーを決め、鋭意取り組んでいく。

①法人移行プロジェクトチーム 委員長・吉永英明、担当副会長・藤本慶光

②山の日制定プロジェクトチーム 委員長・成川隆顕、

担当副会長・藤本慶光

③支部活性化プロジェクトチーム 委員長・越後支部長の交代(宮崎)

前支部長・平田大六から新支部長・山崎幸和(承認)

5・秩父宮記念山岳賞審査委員の選任について(宮崎)

平成21・22年度秩父宮記念山岳賞審査委員は全員再任としたい。

委員長・村木潤次郎、委員・平山善吉、長尾悌夫、河野長、錦織英夫、鹿野勝彦、松浦祥次郎、竹内哲夫、山口峯生、事務局・宮崎絃一、岡部絃(承認)

6・平成21年度上期海外登山基金審査報告(萩原)

今年度より2回の募集を行なうこととした。上期は審査の結果、次の3隊を助成対象とした。

(登山時期、計画隊名、メンバー、助成金額の順)

①09・12、アラスカ冬季ハンター西稜(4442^{メートル})、冬季アラスカ山脈ハンター西稜2010、栗

秋正寿(単独)、30万円

②09・10、東チベットカンリガルポ山群KG2峰(6708^{メートル})、神戸大学・

中国地質大学崗日嘎布山群同学術登山隊、神戸大学山岳部(日本

5名、中国8名)、10万円

③09・8、パンポチェ(6620^{メートル})、日本山岳会学生部パンポチェ登山

隊2009、日本山岳会学生部(6名)、20万円(承認)

7・サンビューハイツ四番町102号室買取(岡部)

6月26日に正式に売買契約を締

結し同日売買代金を支払い、目下所有権移転登記の手續中である。

7月中旬にはすべての手続きが完了する運びとなったので報告する。売買代金は1600万円、固定資産税・都市計画税の日割負担分、マンション管理費日割負担分、契約手続代金等々で売買費用総額は1606万4154円である。(承認)

【報告事項】

1・平成21年度四番町町会定例総会報告(宮崎)

5月22日開催の総会で20年度事業報告・決算報告及び21年度事業計画・予算等決定資料が届いた。

2・委員会名簿発行(宮崎・永田)

A4版に改めて、メールアドレスを加える等若干掲載内容を改訂して発行する。原稿未提出の委員会もあり早急に提出を願いたい。

3・電話の光回線化(永田)

日本山岳会ルールの電話回線は現在 ISDN、ADSL、普通

回線などで構成されているが、通信速度・質の向上を図る点からこれらを光回線に変更をする方向で検討中である。

4・観光道徳の高揚と観光資源の保護週間(観光週間)の廃止(宮崎)

観光庁から、昭和40年から実施されてきた観光週間を廃止する旨の連絡があった。

5・第10回自然児学校開催に伴う役員参加依頼 (宮崎)

北海道支部から会長及び自然保護委員担当理事出席の要請があった。(欠席通知済)

6・2009年度自然保護全国集会報告 (藤本・山川)

6月20・21日、秋田市において秋田支部共催で開催された。全国から148名が参加、本部役員では神崎副会長、成川常務理事、山川理事が参加した。

7・山岳3団体二役懇談会報告 (神崎)

今年度から日本ヒマラヤ協会が退会し、日本山岳協会、日本山岳会、日本勤労者山岳連盟の3団体で7月7日開催、山岳界を取巻く諸問題について広く意見交換した。

8・同好会・同期会連絡会議報告 (宮崎)

6月22日、ルームで開催。24団体の代表・副代表者が参加した。

9・所蔵「陸地測量部の地図」の国土地理院への寄託 (宮崎)

非常に古くほとんど使われることなく書庫に積まれたままになっ

ている地図で、国土地理院未所蔵のものが約1500枚ある。これを一般に広く有効活用願えばとの観点などから、国土地理院に「寄託」する方向で図書管理委員会などと調整中。

10・委員長懇談会開催 (宮崎)

8月1日・2日ルームにおいて各委員長と会長、各副会長、各常務理事との懇談会を開催するので委員会に周知し出席をお願いする。

11・支部化の状況報告 (神崎)

首都圏および地方における支部化の動きについての概況報告が行なわれた (多摩地区・埼玉・高知)。

12・支部長連絡会議 (宮崎)

支部長連絡会議は9月12日・13日に開催の予定である。開催要領の詳細は別途通知する。

13・会報『山』7月号編集報告 (神長)

ルーム日誌 7月

1日 常務理事会 集會委員会 山想倶楽部

2日 総務委員会 山岳地理クラブ
みちのり山の会

3日 総務委員会 海外登山基金審査委員会

6日 総務委員会 01会 アルパイン
フォトビデオクラブ

7日 図書委員会 アルパインスケッチクラブ

8日 理事会 高尾の森づくりの会
休山会

9日 学生部 九五会

13日 総務委員会 資料映像委員会
アルパインスキークラブ

14日 会報編集委員会 海外委員会
アルパインスケッチクラブ

15日 三水会 つくも会

16日 科学委員会 指導委員会

17日 定款検討委員会

21日 山岳研究所運営委員会 緑爽会
00会 ゆきわり会 アルパイン
スキークラブ

22日 自然保護委員会 システムプロ
ジェクト 麗山会

23日 会報編集委員会 アルパインフ
ォトビデオクラブ 山の自然学
研究会 山遊会

27日 総務委員会

28日 インターネット小委員会 自然
保護委員会 学生部千葉支部
自然保護委員会 学生部
資料映像委員会

29日

30日

川喜田二郎 (4042) 09・7・8

千島兼一 (5813) 09・6・10

平澤哲臣 (10612) 09・7・13

退会
庄田元男 (6313)
松本鍊太郎 (11270)
渡 大治郎 (11399)
終身会員
近藤育代 (6381)

7月来室者600名



インフォメーション

◆白神山地ブナ林再生事業

青森支部

世界遺産白神山地のバッファゾーン周辺の生育不良杉林地をブナ林に再生するため、除伐や植樹などを行なう。寝袋、食器必携。できればテントも各自で用意。

日程 9月19日(土)～21日(月)

集合 19日8時、JR弘前駅城東口。または10時半、奥赤石林道ゲート

解散 21日15時、奥赤石林道ゲート

費用 食費1食500円(現地で徴収します)

定員 50名

申込 9月4日までに、ハガキかメールで須々田秀美

(☎)036-0103 平川市本町北柳田96-2

✉susuta@hotmail.com

◆山岳映画と講演会 千葉支部

『チヨゴリザ花嫁の峰』(1959)

年カラコルム遠征隊記録)と、『ナ

ンダコット征服』(1936年、立

教大学遠征記録)の上映と、羽田

栄治会員による講演。入場無料。

日時 9月27日(日)

場所 船橋市勤労市民センター

開演 13時より3時間の予定

定員 70名

問合せ 結城純一(TEL043-26613056)

◆第50回木暮祭 山梨支部

木暮理太郎翁の碑前祭を金峰・瑞牆山麓で開催します。

日時 10月17日(土)～18日(日)

場所 北杜市増富町金山平

日程 ●17日 16時記念講演、17

時懇親会

●18日 8時記念山行(瑞

牆山・カンマンボロン)、

12時記念式典(昼食、14時

解散

費用 1万円(宿泊、懇親会費)

申込 古屋寿隆(☎400-0118 甲斐市竜

王3022-1

TEL 090-4539-3059

FAX 055-276-8004

✉qqpk733v9@feel.ocn.ne.jp

*申込者に詳細を送ります

◆第13回森の勉強会

東海・関西・京都支部共催

日時 10月31日(土)～11月1日(日)

場所 京都北山「芦生の森」(京都

大学芦生演習林)

内容 ●10月31日 12時30分芦生

山の家集合、講演会

●11月1日 芦生の森観察、

16時解散

費用 2万円(1泊3食、演習林

へのマイクロバス、保険)

定員 32名(定員で締め切り)

申込 伊原哲士(京都支部)

(☎)639-1054 奈良県大和郡山市

新町534-5

TEL 0743-5416685

FAX 072-221-5556

✉iharajac@hkg.odn.ne.jp

*申込者に詳細を送ります

◆那須三本槍岳の紅葉と秘湯を訪

ねて 集会委員会

日程 10月17日(土)～18日(日)

宿泊 三斗小屋温泉 大黒屋

集合 17日 那須塩原駅8時10分

図書受入報告 (2009年7月)

著者	書名	ページ・サイズ	出版元	刊行年	寄贈/購入別
山田明 著	劔岳に三角点を! ——明治の測量官から昭和・平成の測量官へ	222p/19cm	桂書房	2009	出版社寄贈
金沢ふるさと愛山会 著	石川 ふるさと100山	127p/22cm	椋鳥書房	2009	著者寄贈
平井一正 編	追悼 山口 克	134p/21cm	追悼文集刊行有志	2009	発行者寄贈
森下恭 著	森下恭写真集 劔岳	79p/30cm	山と溪谷社	2009	出版社寄贈
高橋久恵 編	これで身につく山歩き パテナい歩き方術	207p/21cm	JTBパブリッシング	2009	出版社寄贈
川越高校山岳部OB会 編	青春の彷徨 ——埼玉県立川越高等学校山岳部創立90周年記念誌	390p/26cm	川越高校山岳部OB会	2009	発行者寄贈
蛭川隆夫(編)	針葉樹文庫解題(2009年5月16日)	51p/30cm	針葉樹会	2009	発行者寄贈

市立大町山岳博物館

〒398-0002 長野県大町市大町8056-1

TEL 0261-22-0211 FAX 0261-21-2133

URL: <http://www.city.omachi.nagano.jp/sanpaku/>



入館料 大人400円、高校生300円、小・中学生200円 30名以上の団体は各50円割引。障害のある人と付き添いの人は無料。その他、各種割引については問い合わせください。

開館時間 9:00~17:00(入館は16:30まで)

休館日 月曜日、祝日の翌日、年末年始 *ただし7~8月は無休

交通機関 鉄道:大糸線「信濃大町」駅下車徒歩約25分。車:中央自動車道「豊科」ICより約40分。

——北アルプス一番街「大町」 北アルプスの自然と登山の歴史を展示——

昭和29年に一町三ヶ村が合併して大町市が誕生する以前の、戦争の混乱がまださめやらぬ昭和26年11月、人口わずか1万7000人の大町において、当時の公民館・青年部を主体にした若者たちにより「この地の特性を活かし、北アルプスの大自然をテーマに掲げた博物館」の設置こそが、郷土文化の興隆のため欠かすことができないとの強い熱意をもって、行政を動かし、日本で最初の山岳博物館を誕生させました。そこに暮らす地域の人々の学びの場、生涯学習の拠点としての伝統は、現在も連綿と受け継がれ、2年後の平成23年には開館60周年を迎えようとしています。その間、2度の移築を経て、現在の建物は昭和57年に三代目の博物館として新築され今に至ります。

「山と登山」をテーマに、北アルプスの登山史、針ノ木大沢小屋の実物大模型、登山の道具の変遷、海外登山の紹介を1階常設展示室に、「山岳の自然」をテーマに、カモシカ・ライチョウなど高山に生きる動物や植物、地形・地質などを2階展示室において公開。その他にも山を題材とする絵画や郷土の歴史や民俗に関わる資料を収集し、随時展示を行なっています。3階は展望室として、雄大な北アルプスを一望のもとにご覧いただけます。またカモシカやコマクサなど北アルプスに関わる動植物なども付属園を中心に飼育・栽培され、博物館の一番人気となっています。

今年の企画展として、「アルピニズム誕生 昭和初期の鹿島槍ヶ岳登山史」(8月30日まで)、山々を主題にした木彫の特別展「刻—凛然の軌跡 木彫&彫彩 高橋貞夫展」(9月10日~10月4日)、高山帯の最新の現状を探る企画展「日本アルプス・富士山・白山・研究室発 高山の自然は今……。そして未来は……。?」(10月10日~12月20日)を予定しています。

■訂正とお詫び
7月(770)号、8頁3段28行「女子鍊成山岳会」を「女子山岳鍊成会」に訂正します。また8頁4段17行「スピッツェ山」は「ツーク・シュピッツェ」の誤りでした。訂正してお詫びします。

解散 18日 那須塩原駅16時30分
費用 1万6000円(宿泊、現地交通費)
定員 18名
申込 9月16日までに、植木淑美
FAX 04217341498
✉ yoshimi-denali@jcom.home.ne.jp
*申込者に詳細を送ります
◆鼎談 映画『劔岳 点の記』をめぐって 緑爽会
話題の劇映画をテーマに、史実と小説と映画、それぞれの視点から考えてみたいと思います。
出席者 布川欣一氏(登山史家)、羽田栄治会員、五十嶋一晃会員
日時 10月2日(金)18時30分
場所 山岳会104号室
問合せ 松本恒廣 TEL 03-3332612892
✉ tomuraushi910@yahoo.co.jp

日本山岳会会報 山 771号
2009年(平成21年)8月20日発行
発行所 社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビュー・ハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 尾上昇
編集人 神長幹雄
Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社

◆編集後記◆
●夏山シーズンが始まったばかりの7月16日、トムラウシで大量遭難事故が起きてしまいました。事故は通常、小さな因子がいくつかあつて、それを事前に摘み取れないまま、大惨事に至るケースが多いのですが、今回もまさにそんな気がします。未然に防げた前兆はいくつかあったのに、「日程の消化」をすべてに優先させてしまった結果のようです。そうした事故の背景に潜む問題点を、江本さんに綴ってもらいました。
●山から歌声が消えて久しくなりますが、この夏、白馬岳で「山の歌の集い うたごえ喫茶」ともしびに出会いました。なんとも懐かしい歌が続き、ちょうど大森さんが書いてくれた「もしか或る日」の歌詞もよみがえってきました。(神長幹雄)